

宇陀を駆けた人々

重源 篇

東大寺を復興した僧重源、宇陀に寺院を造る

平安時代末期から鎌倉時代前期に重源という僧がいました。京都の醍醐寺で真言密教を学び、のちに法然から浄土教も学びました。また、宋（今の中国）にも渡り、仏教を学びました。

養和元（1181）年、重源は東大寺復興の責任者（造東大寺大勧進職）に任命され、寺の再建を進めました。東大寺は治承4（1180）年の平家の焼き討ちによって多くの建物が焼失したので、復興を進めることとなったのです。

文治2（1186）年、重源は、大仏殿再建の試みとして、実際の5分の1の大きさで建物を建て、寺院としました。その寺院は、大宇陀春日にある慶恩寺。今も宇陀を代表する寺院のひとつです。江戸時代の火災によって本堂などが焼失してしまい、残念ながら今は、重源ゆかりの建物は残っていません。

慶恩寺の鐘楼には、古い梵鐘が懸かっています。銘が無いため、造られた時期はわかりませんが、東大寺の大仏を再び造ったとき、余った銅で鑄造されたものと伝えられ、重源の発願ともいわれています。

重源が再建した東大寺大仏殿は、その後の戦によって再び失われ、現在の大仏殿は、江戸時代の前半に再建されたものです。

